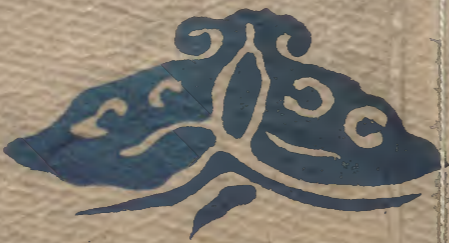


和書門



和書門			
類	二八四	二〇	函
架	一	一	冊
冊	一	一	冊

庫文閣内			
類	二八四	二〇	冊
架	一	一	冊
冊	一	一	冊

(一七七)

七十一



内閣文庫		
番號	和 28420	
冊數	100 (71)	
函號	211	300



A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

Kodak Gray Scale



© Kodak 2007 TM: Kodak





明治十二年購求



塩尻卷之七十一 某保

鈴野群載抜抄

鬼の法吸物

棋石山

峯首多目と贅と云

涉三九の涉飲小異の傳

髓より火出るとい言

在安民

善井白石著麦麩の詩

東山為室所為の殿の字

爰の怨矣



將軍家涉卷

惣

盲小能くして檢校の者

武家正月馬乗初

藤武の唐書の弁

世よ能く菊の葉

武智唐

西行法師の息

乞漿得酒

曆子記と三伏



桑海集云

禮記雜辨任

天工開物拔書

四十二卷の厄年

群書拾唾

以痴為九百

神君海元彼

茨枝龍眼

醫考の雌雄

男女始生為黃

秘子宗の想詞

十二卷の月

七飲短飲

群書佐考四善法曰

四百四病

祭祀獸肉と儀と

米粒と舍利佛と儀

落花生

西瓜 楊梅瓜 南瓜

凡そ福と食く君子は方者

靴

大學の題注

玉笑零音云

富士の裾野と云ふ所

西笑

我國古官の漏刻と並

小野小界

倭内牛多く乳を肉

枚生いりりて之を根

忘名之士

珍學大之抄物語茂曰

生俗韻曰

略言清三子風の恒才とて菴

如衣

騎火茶

人不能思

淡路國大和國魂神社

井伊家の切臣菴原系

伊尹之而沃下蘇以天子之礼

女冠男冠

異祓、注未の始

入梅日限

家語枝抄

魚ち肉

種の咽より入るを治す

表石鼻より入るを治す

ぬのうゝゝゝゝ詞

形體

魔羅

唇ハ一相二相と云ふ

天竺の峯者の月

襷のぬき糸を子用ゆり糸

馬鞍の字形

旬屈

初討の咽より入るを治す

胡椒より入るを治す

餅の倉傷を治す

瀕死せらるるを治す

きんかに

中納言成頼

唇の鳥

秘府畧

あまがき

弓二張勝ふ付

石のかき

真菜

手本かのか木

冠着する付

サカハ悪の字は刊

歳徳の意方

○朝野群載三十卷三善為康永久四年丙丁編次

永久後多和院手号也其中一二有抄本

笏長一尺二寸

上廣二寸七分下廣二寸四分厚三分以体合有半月之形

北極玄宮無上無極天皇大帝尊皇

北辰なり糸文よりしり

○將軍家湯卷

休代世生身震筆の勅書以載一筆と希有の
湯子外より書貯りし武門の繁昌ハ船政の安泰
のり為よりと云馬に因ハ湯子より秘伝に成りし
湯子ハ女御に成りしより一筆世万葉と云書は自
校湯子けりしと云北井と云書天徳より成りしと云

十月下

法名沙判

十征代の善を立天下久しく治す力を成り凡庸人
財を富むべきを必死を志し終暴放恣を成り
乃ち子孫を其より以て防ぎ平和漢等を見作り治す

○或記曰永享七年十月天野民部少輔遠幹己の館内
秋葉山に於て遠州怨を討獲信抄林氏宗よりりて

徳川為、秋吉同八月方徳川殿遥初彼鬼を羹
りし事。松平家第首鬼の法善はより起りし事
す。林氏此村落の毒を秋吉より是落れ此處の槍

興と云い

○念音閃 注羣魚奮散京 孔氏の法を真し因りて

を門中より人有り或を凡そ或ハ凡そを起りし事
すも魚の細きんよりおとす事。逆にやぐハ念の字と
水中魚有魚母の形也形り

○棋州大坂を中世と石山と傳へし。永祿十八年迄の古
記東に那生玉在石山本願寺と書ふ物あり

○信長の財首人ありはし。其世の法を出し檢校と
なりて利を討ちて棋州各庫の津歩見より以て富
高かり亦河村様との形を好む故人をあまきり泉
南よりハ才飯人を考へ若くは京師を搦討つ役の好
婦なり村井長門守を捕誅す。亦安土宗廟の時
誅せし事。不信を九州の者一切徳を誦しりる候り

さしつゝの流を形しる

○ 武家年格の五君と辨けりる多目と擧げ贅とすは
天正十年正月元日江抄安土の城に信長僉約
合ありしより始とす

○ 武家正月馬當初より二月の法中を爆竹と稱し
名ありし武士馬を誣くを終りふかきり年々さきさき
ふかきり年々物と共二月の喧しと云くを在り
誣をゆるる是を年格の初めとす亦其以て馬當
誣する者も減物たりて夜をせり是を初めといひ
とふべき法も其すこころありて頼蓋の名今も初め
今もさしつゝ

○ 敬公の流時より流紋のすこころ大樹と同一とすこれ
少く吳者ありしに附せりてさきかありし松平伊豆
河より流紋とすこころ公作曰くは神君命有る
尾張家葵の表葉とす裏葉とす紀伊家の表葉とす
裏葉とす水戸家を三つとす裏葉とす附きしは作を
善ししなす命のすこころ少くは作を善ししは作を
善ししは日比流紋の物とす作を善ししは作を
流紋とす伊豆も甚だし不知の罪を謝するなり
流紋とす古人流紋とす

○ 藤武の厚書ゆりて其山ありし單干と奇と云あり
藤武と云く藤武と帰ししは一時の流紋とす

使者をくくつて語らば一語も此を在事として
訪紙を伴ふらざると好事の者後、附会して宋の
郝徑を真州に留めしめて、乃是より命の訪を繫ぎて
其の信宗の妻を燕に訪せしめて、其夫の信と傳
張九齡を鳩小書と訪ひ友人の投せしめて、因元遠を
夢蕉訪語せしむるに、又遠事を在事國の物語は、
いふもあつたやと傳り訪語を附の信傳して、乃
ち在事と志りして世のあつたにせし、
傳へく言事とすりて、
經より小彼羅捺國の鷹書の事と、
蘇武の在事小りて傳るるを佛説も鷹書の

事をくくつて語らば一語も此を在事として
訪紙を伴ふらざると好事の者後、附会して宋の
郝徑を真州に留めしめて、乃是より命の訪を繫ぎて
其の信宗の妻を燕に訪せしめて、其夫の信と傳
張九齡を鳩小書と訪ひ友人の投せしめて、因元遠を
夢蕉訪語せしむるに、又遠事を在事國の物語は、
いふもあつたやと傳り訪語を附の信傳して、乃
ち在事と志りして世のあつたにせし、
傳へく言事とすりて、
經より小彼羅捺國の鷹書の事と、
蘇武の在事小りて傳るるを佛説も鷹書の

無く邦へ便しきしりかりし心と故の故とすべ
彼傳ふ出ふも如し一在事とすりて伝ふ如事
和漢より多きなり

○今の故負者と思はるる體より火出る人より一白紙に
富那奇倭鬼のふりしりし支那悉火出る窮餓の至
と傳ふを生かする多死の人をいふなり

○三十十年前世よりていふなり一侍臣一兼為某者
花より厚く重なりていふなり一其を神をいふなり
善の業をいふなり大方単純にして怪と見ゆる世に怪
なりすなり人の公よりいふなり

○在安民と禹曰若時惟帝其維之と蓋し天下の經^理

於て難く事なり私に務めんとする天下の物を於て
蔽るる事なり人よりいふなり蓋し能く人より後世に
材能をいふなり今を以ていふなり一以て有る才
有る徳なき小人自其事を得る位より一福と徳を
國政を左右して事を破る者衆希也凡塵事を
掃り淨きを遺り阿彌と容悦を事し一掃覆
く明を固し其為る事皆己の利ありしなり
若し小人若し非也然し亦其をいふなり一窮ふあり
只人君所言をいふ迷ひ宮圍の逸樂を掃りいふに
依りて其已に将恨する者なきなり一其をいふなり
其奸隠を不見して却て是を説き一權を盗りて國

きうをいれく後止ふり者古今亦多かりし也

この世は初めありしよりいづるも其終を見まは大方

好彩の小人ありぬれば凡る眼ありし何と感ふべき

○藤原南家の祖武智麿をフチマル或ハタケチマルト云

諸君也日存紀私記ミタ者謂言貴為武智解ミタム

チマルト云解大日靈貴の歩の字を以て

○葛井胤後守名ハ政字君美白石ト号ス蕎麥麵の詩

落礎玉屑白饅々 素餅團圓月様淵

芦倒糸洲吟雪下 蓬飄平野捲沙来

鷲刀探処激絲乱 翼釜烹時疊浪堆

芙蓉葦葱宜佐饌 肯將麻飯訪天台

よくかきしり信ふ河漏とそは切のりしり其製

吳ちり山ねりも切を家國の饌元甲州天目山を

初りしり也

○西行法師の息慶縁法師を栗田宮崇徳院子権

外尚をりしり盛喜記あり

○足利公方家東山為し新室所為し稱方重私小

あり次文郎十五多六月勅命を降して是也

り一京花集よんくし也紀長記因之

○公方家の御所を殿中と稱し義満公の時よりかく稱

きしり也殿中途中行事しりしり也

○乞漿得酒といはるるのすくをこり具以のゆめ

考きわくる如也

○或曰わくし菅原の志美比叡の山法性坊より觀し
より其古跡を其云叡山遺教院其所より
神起りし觸まると天より降りしりり降る今も
登天石をんりりあり

○曆より記し三伏 五月中後第三庚為初伏第四庚為中伏
七月節後第一庚為末伏

秦徳公より始する史記 秦本紀 のはより五雜俎

元下西戎の俗よりして三代よりなりしりり

○蠡海集云地府十王蓋十于之義其五稱閻羅最
尊位配戊土居中故也云々

正法念經より只稱摩羅のりありしりり翻譯しり

双王より小兒の男獄をまより妹を女獄をまより凡の

兼門正統 十五の号より成於府大聖慈寺の慈川より俗

經より始する 地蔵菩薩名目
因縁十五經 於摩羅を冥界地府

のまの存より十于より祀しりり戊土を祀りしりり之を

凡より地蔵を大地の初徳を以て稱するに

閻王を地蔵の表合稱身より次きまを亦無衣を奪

衣婆も閻王兄妹の別より糸よりりりり

○或云中元の月を詠し中秋の禮を信する唐の書
より我國の九月十三日をんりり月を奠次或は異稱
ともも月の訪ありしりり又終りしりりも云爰の詞を
とてても是も一府の舟也まをいつまの代より十三日を

之を按以仿りし予曰中右記中右の右麻記と考ふに
保延元年九月十三夜之宵雲淨月明なり寛平
法皇名月無双之由被作出仍我朝以九月十三夜為
明月之夜之於此也宇多院元年十三夜の月を
貴し仿り形を以て

○禮記雜鄉任在注凡立者尊右坐者尊左云々往古
右左と云々右丞相一左丞相云々云々
凡左道左迂在計左官云々後之改く左を尚
り吳元年十月改之左才右の爲立ハ身之有者右左立者の
左也云々右南爲右君位少南爲右臣位云々其尚
と云々右俱又東なり云々

○拾芥抄曰長歌五七七五七七五七七短歌ハ
五七七五七七七七

○天工開物三卷上中下吳郡の雜記云々凡々十八條
抄云々其内云々其中又本條の事凡々抄云々
其内記其圖右界云々

布衣 赴 彈 紡 其圖

凡綿ハ潔寒棉花古書名桑麻種遍天下云々花
有白紫二色以下畧前ニ出

○三幣 管子

以珠玉爲上幣以黃金爲中幣以刀布爲下幣
刀布ハ曰曰錢也云々國古昔玉を以て幣と云々中世

以来ハ黄金白銀後貨を以て用以て珠玉其宝なる
の故去々以て且幣として其紙を切て串を繋ぐ物
との思ひ作り也

○群書備考四 茶法曰茶名始見於王褒僮約盛於陸
羽茶經而其税則自唐始也云々

今唐土煎茶の事ハ我々治の名産の如きを
なり明傍千果カキニテハ亦も在國の茶を上り
す一唐茶の事ハ漢の事ハ雅なる事ハ雅也
亦ハ茶の事ハ及んば

○四十二歳厄年の事或云至感應畧秘に載す魏の
道泰の存りよき事ハ是も是も道泰一人の事にて

人皆四十二にして厄難なるも作りて其後作りて不
足は靈櫃の年忌十六廿五三十四四十三五十二六十一を
人の大忌として四十二及び三十三歳を其 是ハ我々作りて
四二九の言三三さんごの言ちんごを長くしるる東江は凡
唱は人生をくく考ふ斗を何年の年何月の月何日
の日はありとて世を世常の術才を病の害公を憂の
憂して漢史も厄難なき財ハ是を免せんとして思を
病ハ神は毎の以佛は法は法祖傳の首を以て
作りて大方なる痴人をして其の淨土我常轉倒を反
して真相を悟らん日寔の安穩にしてさあを終
此若し其の事あり作りて

○四百四病を維摩經に論じし出医者も孫思邈
の千金方に見えを也

四氣合徳四神安和一氣不調百病一生四神
動作四百四病同時俱發云々 千金方

○群書拾唾李靖十二陳をのせく塔方角と以て名
其中より方角を以て大馬と名付 是方角の
水也 摩訶大伽羅
黑天元より四方の神歟

○異邦の祭は獸肉を供へ本國の社其獸肉を忌む是
元少地の自然なり東南之人食水産西北人食六畜
五雜 日本を東南の國にして水物多し獸を食すも此
多し惡瘴と毒と温候の風氣を忌む生ずる人獸肉を

食ふ可なりん也 俗に風土の俗多し 東西西土の
非祭怪しむるもの多し只祓教め在の禮は於て東
西河を異なりん

○陳無忌云世人以痴為九百謂其精神不足 愛日齋
叢抄

是を後一貫文よりて一百文也 是より三也 本國
果東西をさして不足を修むる事ありん

○天竺呼米粒為舍利佛舍利亦似米粒是故曰舍
利 秘藏記 舍利者稻穀也 馱都者佉体也 慈恩上
生經疏

○東照神君弘治二年正月十五日御元彼 于此十五
歲
今川義元加冠理髮 関口刑部少輔親永也 徳川
法郎三郎元信と稱 是連の代名也 元の字ハ
義元自名の字を名せり

辨口右義元の妹の夫なり此女を以て公女嫁せしむる
後築山殿と云

同三年四月十日法名を改め元康と号せしむ此時

松平義人を稱せしむる公方故使を以て法馬を稱

せしむる此は松平公方の孫將軍義輝自筆の

法内書と云く法太刀と云く世々の其書云

這陪供者名越妙女云々を是應元款之と云

と云名法自志不斜其方始娶と云後法太刀

一腰未國光と云く程河川右京守下也

五月十六日

義輝 花押

松平義人

と云く右京大夫吉晴元也是亦のりを知りし者也
神君名冬州と云く此のいふ事と云く三川右京の陪臣
と云く此のいふ事と云く此のいふ事と云く當家は此の事と云く
此の事と云く此の事と云く此の事と云く此の事と云く

○ 落花生ハ豆蔓菜葉一遍豆ハ似テハ豆花落花生地一果
古中結其味甘美豆子若くハ人孤貴ハ豆東垣食
物本草三才丸名山菜ハ豆類也ハ豆ハ元公毒好
補虚の物ト云ク此ハ豆の類也

地抄抄ハ其極也ト云ク此ハ豆の類也
豆ハ豆ト云ク此ハ豆の類也ト云ク此ハ豆の類也
豆ハ豆ト云ク此ハ豆の類也ト云ク此ハ豆の類也

○ 荔枝龙眼其又國中子生して二種一類の如くたるを
 と能因りかゝる荔枝を多く食むを西郷と云ふは
 眼に此事なり

○ 西瓜を東垣礼の刺瓜の文よりして古より中國に有
 りは終て中世契丹より傳へりその書を傳
 へりは食物本草に一種楊梅瓜の如くありて姑生し
 終て形少し長一過りて大なりを臘紅味西瓜と
 稱せり終て次年の瓜もありて壞を以て之を
 は瓜名は國にありて

○ 南瓜ハ元回統の瓜也日本物也亦が瓜也といふあり
 ○ 蟹を唯雄蟹也又其つを若くして思慕惟

悴して我を古人之を匹鳥といふ此を性淫を以て終て
 の食むるは能く食して之を亦たりといふは終て鳥は
 其より食ふは其中の昌候魚は終て其より食むる者
 たりといふ非也人よりて其後之夕へ中出く其より食むる男
 たりといふ能く事も終て其より食むる終て其より食むる
 ありといふ申のきりて其より食むるありといふは
 ありといふ終て一夫よりて其より食むるありといふは
 ○ 凡そ祿を食く君より事少くも其より食むるありといふは
 此より忠より三あり道を行く君より食むるありといふは
 大忠也徳より君より視く是を輔ふは忠也是を以て
 非を陳く是を怨むは忠也

周公ハ大忠管仲ハ次忠子胥ハ
 下忠也韓詩外傳ニ出

礼記は人臣を其身を殺して君を益あるは別為之と
より中務に宗良親王の歿

君の為世世を免何の事か

才なくはあふいの事なりと

鳴呼仇牧を幽王の乱は首を断つるは安産孫の公を割
く信をあふも山岳の志鉄石の公に死臨毛断て不
後を武士の志はあふも夫報國の志形くして大祿を
食を盗まじくして世大くして其の事を知りて信
は侍官のものに平くは利を先くして義を存りて
のこる信は加は抱關の事を思はば運魔の勞ありは
他さくはあたるかやをたうくは事ありて止

君は侍方なりありは祿たる元庸なりと

○ 通志に男女始生為黃四歳為小十六為中二十為
下六十老とあり老よりは静ありを名利
を遠くする人なり

○ 歡ハ音襯殿齒也と字書小なり元を男子生すと
ル月よりして齒生し七歳よりして歡女子を七月より
齒生し七歳よりして歡は云齡をよむは元
齒の字と歳と月よりしは也 上ケルを齒といひ
下ケルを牙といふ

○ 形は高者慈詞多し先取位多し村本と日るは本
たうりとも因り慈意有山とて取中よりして本籍を快子

と厚に著し、何と厚者同し、其意也、何と厚のすなり、
 公よりと云仍て是と厚は区後しく、何と厚と云との也

○大学の題注大旧音泰あり倭音ハ昔々タイナレモ
 同知の音中、形、と云人侍り、予曰大ハ濁音タイ唐音ハ
 泰ハ清音タイ唐音ハ、心、何と厚と云、何と厚と云、何と厚と云、
 者ハ大小の大也、清者ハ少の反対、して博太の義、形、

劉昌宗も亦濁音と云也

○玉笑零音云人之初生以七日為臘人之初死以
 七日為忌一臘而一魄散故七々四十九日而七魄
 魄具矣一忌而一魄散故七々四十九日而七魄
 泯矣易曰精氣為物遊魂為變故知鬼神之情狀

○鴨立澤三子風、何と云、養又魂遊大納言西行の
 像を鼻を歩み、其上又自書流流小賛 西行の奇
 いはくも何と云、何と云、何と云、何と云、何と云、

此亦何と云、何と云、何と云、何と云、何と云、
 何と云、何と云、何と云、何と云、何と云、

○富士のすむ野を云、何と云、何と云、何と云、何と云、
 左者まき狗の思、何と云、何と云、何と云、何と云、
 十四日、何と云、何と云、何と云、何と云、
 何と云、何と云、何と云、何と云、何と云、

○母衣ホロ、何と云、何と云、何と云、何と云、何と云、
 の何と云、何と云、何と云、何と云、何と云、

傳あり按ずるに日存紀より景行天皇の御秋摩倍羅

摩倍羅と秋記鳥の腹下の毛をすかるるを以て掩ひるを

義也と傳ふをかるるに矢を掩ふをいふ也

同書九神功皇后の御秋末利擲云々征矢也

秋記云甲冑の相入はかきと箭也と世のころのき

○五色線宋の附の曰人聞長安樂則出門西向而笑聞

肉味美則過屠門而大嚼是を西笑とて白くはむ

事ありとて

又彼書に騎火系とて火前とありは火後と誤

りしは也注の附火を改むるをみるに家上此

系を清明の附節法とてを以て形なり

今案辛丑節を以てを以てかきかき系牙清

明の法を採取するもたゞ立夏の法を牙清侍

りしはなりて産製より傳ふ

○或問我國古く官に漏刻を並鼓を以てナニ也と告

不知候後と撞く時を知りしをナニ代より也

予曰百練抄曰大治二年陰陽寮漏刻樓撞焚云々

は撞を桓武帝遷都の附作り候なり所の由三百七

終あるに家國上久しし附の撞ありしを以て傳ふ其

始を以て桓武の法也

○居家必備の撰生要録に彭祖曰人不能無思當漸

○ 除之云々 但能不思衣食不思声色不思勝負
不思得失不思荣辱云々

嗚呼世人常々病あり延年ありんがを欲せし者
形して其養生の道を知らずはるる衣被は
奢をかき飲食の度を嗜むをたむをたむを
自他地方の思ひなりしと湯と香の香を好む利
名の街より世常を語り厚を悪む心も好む
毎に思ひを考へて身は病ふか人事を欲する
をたむをたむをたむをたむをたむをたむを
也一是と云ふいふるる厚るる心と喜ぶる陽を
墜一念怒を陰を破る然るる魂を傷む憂愁

を後を痛しめ憂愁を念して倚り憂形とむ
物を性も損し疑惑を念を害し波動神氣を
失は或は起居節ありは行立度即ち名を好む
事も福も夜もく侍りうし風を温思とをわが
雨もあまふも病もあまふも病もあまふも
も考へてあふゆふ不養生を考へて病病あまふ
その御も病もあまふも病もあまふも病もあまふも
念を好む是をわが病もあまふも病もあまふも
以て病もあまふも馬もあまふも病もあまふも
道もあまふも病もあまふも病もあまふも病もあまふも
身もあまふも病もあまふも病もあまふも病もあまふも

いつての知方毎きはまを差幻のあき形りか
たし以保養其法の中ふすもきまのふ菜の
まを乃たき長生の為奉養はもみ次も也只
とき世の園をいて、三界の外は道空し信んごと
あもあかりま此有な敬佛意を舞まを旅い
迷信と身き法ぬ之を学ひく三途の機意を離
ま九示の淨若小の極し唱呼

○ 小野小町の事ありての形は、
拾遺は壯嘉世はと引くあき盛んあきし
りてたまきし、
十九よて父あまき二十つよて兄あつて
ま三よて弟あつて

先くして、
さらたまき三河國よへり、
よあつて

○ 淡路國は日本最初の本土として津名郡淡路伊佐
奈伎神社 名祇大社 三層殿は
大和國魂神社 名祇大社 お
たし、
あまき、
神書
海書の人あつて

○ 寛永十七年庚辰、
近湯殿法依守治郡を庄の以民利里を
去りて、

作も云土地の邦を何よりしては尋あまし柳陽邦正
二位よまし海をく啓せしと涉秋採りて経冊と糸
らきし行いと邦殿を捧りてより此福を乞ふ人
其法詠所を傳く侍る

本源自性院關白

信壽公
法名志山

あまのまゝとまゝの御祈り神を造る

死ぬるをうしひて男をばりて

和歌の妙なるいづの事よりてかゝる高貴の心も向を延よ
邦も安きをうしひて男をばりて形りける

○井伊家の功臣菴原某と出陣の際に後痛きりしを
推して出立しよ 神祖法業を願ひて是と云ふゆりて

之友も後世も命有りくかしてけさく御義を
尚存す妙に飲りて此を法賢のしりて津よ
勇形の志うら着るもあま御祈り期に思ひ形も
此一戦の死を死りて天晴よあま御祈りして
大い感させしりて武門よ立戦場を信
む方のいりてゆるめりて末のあま御祈りして
太平日久しき武人といへも自念ゆりてその志
為くたより作りしや念佛の法若く死の畏れを
乞ひて形も世をまゝと一枝の花一弁の香を供す
し是を賜りて身も福ありて年々の志と法を今生の
命を絶つらん物無き物して百年の末も命ありん

ヤゝ支交一以願能なして名利をいよく白紙
私を催法を思ふと僅よ病や臥るを医を集めて務を
なすに以て命をけりあるごとく毎下よあやうしくる
目も折し後世の流法をたふしとらんまみちかたを
いふべき業その思ひしして移ひのするはいふあやう
すふ佛は者ともいふ

○放生をいひてて子若根まきにはまてし五無相の生日を
候ましく又羣大郷毎の雀鶴を放ち一放毎を移て
然るに相公一百二十年まきていひ名阿からしき
謗言已より利ある人なすまは有所得の作善何の功德
うあらん移りよ高き小禱といひく生類を殘害

して其心をころ者まを毛は掃子方や作らん

羣氏の登倦遊録より出た

○伊尹亡而沃下葬以天子之禮周公封而成王賜
以天子之条棄天下尚為故展礼条豈為虛文生
前名器或惜繁纓死後切勳何難墜道錢唐田藝
蘅 玉矢零音

○忘名之士能棄万衆之君好名之人能輕万衆之
國 同上

○女冠男冠妹喜亡國男服女服何晏喪軀 同上

男冠女冠を弄愛するも妹喜亡國 女冠男冠を盛かるる
少色女冠を弄愛するも妹喜亡國 女冠男冠を盛かるる
治容淫を以て道途を汚るる

琴学大意抄

琴の起り其事

琴の起り古世本より書き六神農の所造といへり琴
操より書き六伏羲作琴所以脩身理性惟及其天真
とて楊柳の琴清英より書き六舜彈五絃之琴
而天下和竟加二絃以合君臣之思とて桓譚の
琴語より書き五絃第一絃為宮其次商角徵
羽文王武王各加一絃以為少宮少商とて何
杜氏通典卷二百四十四見

琴の名所其事



是ヲ護軫ト云又甲掌

トモ云雁掌トモイフ

七ツノ穴ハ絃ノトホルアチ
コレヲ絃眼ト云

是ヲ舌穴ト云中ニ舌ノ如クナル物アリ

コレヲ風舌ト云

此間ヲ鳳頭トイフ

是ヲ養露ト云又岳裾ト云

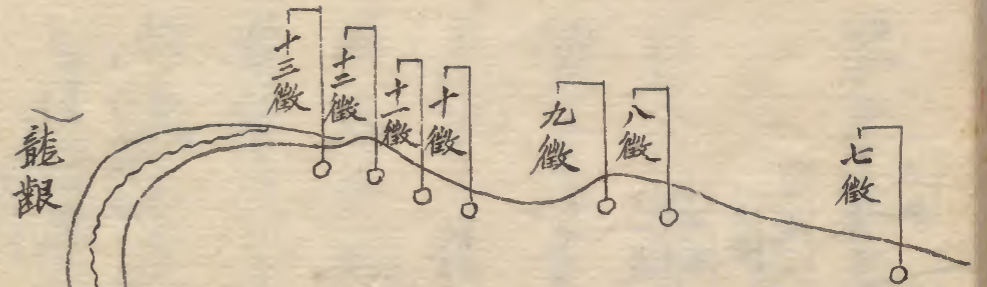
此ノリタル所ヲ鳳喙ト云

此出タル所ヲ肩ト云



此内ニマロキツアリ
 天柱ト云ノトハハミ
 ハヌモナリ

軫池



ヒツヒ
 焦尾ハサキノカタノ惣名ナリ

此足ヲ鳳足ト云伝ヲツチク処ナリ
 此クリタルヲ腰ト云龍腰トモ玉女腰トモ云

有ヨシ長クハ
 鳳
 池



龍池ト云鳳池又声池也
 云声池ハ甲板ノ内ヲ堀テ
 ヒビキノ為ニスル上ヨリハ三ヘ
 ス鳳類ノ裏ニアタル
 此内ニ方ナルツクリ地榎
 イフソトハ三ヘ又ナリ
 鳳足 鳳足ノ坐鳳眼ト云
 是モソトハ三ヘ又ナリ
 鳳沼又韻沼トモイフ
 韻沼ハ甲板ノ内ニ堀テヒビキ
 ノ為ニスル上ヨリハ三ヘス
 焦尾ノ上ニアタル

琴の名を右に記す一弦の長サ三尺五寸を今尺と直
 して二尺五寸ヲアキ有也岳ノ下ヲ調製之の方三尺五寸今尺
 として二尺五寸ヲアキ有也此ノも是ハ大槩の恰好を書
 するもよみて古今の名琴長短をよみて見たり

琴の寸法と作る事の事

琴の寸法と作る事
 一弦の長サ三尺五寸を今尺と直して二尺五寸ヲアキ有也岳ノ下ヲ調製之の方三尺五寸今尺として二尺五寸ヲアキ有也此ノも是ハ大槩の恰好を書するもよみて古今の名琴長短をよみて見たり
 一弦の長サ三尺五寸を今尺と直して二尺五寸ヲアキ有也岳ノ下ヲ調製之の方三尺五寸今尺として二尺五寸ヲアキ有也此ノも是ハ大槩の恰好を書するもよみて古今の名琴長短をよみて見たり
 一弦の長サ三尺五寸を今尺と直して二尺五寸ヲアキ有也岳ノ下ヲ調製之の方三尺五寸今尺として二尺五寸ヲアキ有也此ノも是ハ大槩の恰好を書するもよみて古今の名琴長短をよみて見たり
 一弦の長サ三尺五寸を今尺と直して二尺五寸ヲアキ有也岳ノ下ヲ調製之の方三尺五寸今尺として二尺五寸ヲアキ有也此ノも是ハ大槩の恰好を書するもよみて古今の名琴長短をよみて見たり
 一弦の長サ三尺五寸を今尺と直して二尺五寸ヲアキ有也岳ノ下ヲ調製之の方三尺五寸今尺として二尺五寸ヲアキ有也此ノも是ハ大槩の恰好を書するもよみて古今の名琴長短をよみて見たり

亦反声二百五十二合て五百十一の者へ其上又右左
よきものあり是をては、律小作りてうまひ是れん
せんは、文字の好も是より、其の琴の音を、よくに是れ
唐きや、好し、是れ一の、送義好し、二は、古し、又人を、好き
風雅を、まゝ、六八の和と、面白き、うに思ひ、よ世、善き
よ、後、ひく人の、公、追切、残、は、は、成、り、小、より、て、日、調、の
志、か、と、合、ふ、を、の、二、美、極、して、琴、の、調、を、秦、調、と、申、して
此、も、日、調、と、月、ゆ、り、な、琴、法、を、細、く、ぬ、く、す、る、に、よ、を
て、他、弦、は、遇、て、も、其、音、と、う、ま、ら、す、し、て、管、を、よ、小、遇
て、其、形、も、形、く、ぬ、り、唐、の、高、宗、皇、帝、の、時、琴、す、り、行
く、小、より、て、呂、才、より、人、は、勅、して、再、興、と、し、め、あ、は、ら、に

玄宗皇帝は、琴を、絶、の、小、撫、ひ、あ、ひ、く、鞞、鼓、を、り、つ、く
琴、の、種、と、靜、人、の、よ、り、事、も、有、形、り、異、國、も、夫
より、後、を、大、才、匠、者、の、教、ひ、物、の、中、よ、明、和、の、書、を、よ、小、を
い、ひ、く、宗、廟、の、樂、を、儀、式、と、り、て、琴、を、用、ひ、り、り、ん、え
き、り、是、又、琴、の、廢、り、い、は、ま、形、り、三、は、琴、の、絶、は、は、り、
の、よ、り、後、も、律、を、作、り、き、す、り、け、お、ら、ま、は、秋、の、者、よ、つ、ま、て
彈、奏、き、り、と、世、の、風、界、く、な、り、て、き、ま、く、の、物、と、ま、
絶、ひ、り、の、本、を、ま、古、し、の、樂、絶、は、り、り、は、催、馬、樂、風、松
の、形、ひ、も、二、の、世、は、大、形、絶、ら、ゆ、也、は、是、れ、琴、を、う、ま、に
は、ま、く、送、ら、ぬ、一、は、二、琴、と、再、興、と、し、め、ら、ん、人、を、事
法、幽、董、の、譜、よ、り、中、絶、も、う、ま、ひ、の、よ、り、な、り、琴、の、法、を

よく海峯の律の律を在せしむるに
の曲と奏しきり半吳國の書は凡そ此を歌と樂との
一合をさすと夫して第箴策といふの亦然も函原の
曲をさうたてて凡そ此のつらきか合せかを
果たりて何まの亦も琴のなりまんの形り後郷
東小生まると是は漢西に及んぬる堂上樂家の秘
傳をもたしは僅しつたつ智の安をる樂をとりて依
て吳國の書をゆきまを忠者のつ漏れも正まての公を
思へも遠あるものも多かりしきれも世才は楊州に
精なりん云々の篇にて樂をなせるるを文章を述べ
て是は漢書に西と好しきも昔は遠く有る末の世の

説は感し古も後すものふれまはる今太平百年を
て諸の道息まも琴の事ハ沙汰する今まの始りて
遠くもの多し書置しんは志ある人の階梯とも
なりしと申すは粗坊を録して物氏の許し始りし地
享保七年壬寅四月廿八日
物部茂郷

- 後漢光武の討日本垂仁天皇の討日本
より供者とせし事あり是西朝漢書の始也
- 琵琶橋の一里計に在る琵琶塚といふ所ありは所
を師長の帝の橋を掛おきし琵琶をうらう所
とあり

○ 籟籟乙 客曰問者書后紙于籟籟乙三字多
懸民間門戶不知是何字也答元世生米渡舟子
驅疫鬼之符也群從採餅第五僧梵部曰豫章之南
數十里生米渡乾道八年三月八日有僧晨濟將
登岸戒津吏曰少頃有衣黃衫五人絡籠而至切
勿使渡之則有奇禍取筆書三字似符了不可識
其文曰籟籟乙以授吏曰必不可拒當以此授之
語畢而去吏不甚信然私怪之至時果有五人衣
黃衫如府州縣急捉者各負籟籟直前登舟吏不
許渡皆怒罵欲毆擊良久不解吏乃取所書字示
之五人一見狼狽反走轉眄失所在委籟於岸

○ 側祭之中有小棺三百具吏焚棺而傳其符豫章
人家之圖供之是時江浙多疫此邪晏然識者謂
五人乃疫部鬼也僧必異人

○ 生俗韻曰生朱惟切音錐与秀義同

○ 客問曆之唯入梅之有之出梅之節之俗傳
之梅雨出入乃或曰十八日或曰十九日或曰二十日或曰二十一日或曰二十二日或曰二十三日或曰二十四日或曰二十五日或曰二十六日或曰二十七日或曰二十八日或曰二十九日或曰三十日或曰三十一日或曰其限歲之試之出梅之日必有
雷雨最足為識焉本仲鑑目第五曰梅雨或作徽
雨言其沾衣及物皆生黑黴也五月芒種後逢壬
為入梅小暑後逢壬為出梅亦以三月為迎梅雨
五月為送梅雨

○ 馬蛭 ハカテ

雨具 出家語

家語王肅註孔子北二世孫孔猛後序

○ 家語曰季孫聞之披然愧曰地若可入吾豈忍見
宓子哉

世の滌く地を割く入をくは是也

○ 家語三卷篇曰夫江始出於岷山其源可以隘觴
及其至于江津不舫舟不避風則不可以涉非唯
下流水多邪

物の始を隘觴といふ是也初は少くして後大減なり

○ 旬虛 鐘とかがちの莖なり

○ 厘ちち 漢名系瓜和名いりり

○ 初計の咽より入るるを治す

或者初計の咽より入るるを治す
種より入るるを治す
系瓜ともいふなり
初計の咽より入るるを治す
種より入るるを治す
系瓜ともいふなり
初計の咽より入るるを治す

○ 種咽より入るるを治す

或者麦の種咽より入るるを治す

○ 胡椒より入るるを治す

佐久乃劫古海皮子具或肘胡椒の粉鼻より入るるを治す
種咽より入るるを治す
系瓜ともいふなり
初計の咽より入るるを治す

○ 鼻石鼻より入るるを治す

ある人鼻石より鼻の穴より入るるを治す

一水試しをりして一方の穴に入らざるをみりて石出
きりし也

○ 倭の倉傷を尋む

尾州名古屋真浦倭の倉傷を尋む或人倭の油あけを
倉にく倉傷の亦たありて医孫を治りてまじも疾たが
ありて志南より庸人ありてありて治り孔柑子を
碎き浸り汁を口に吞みしる立所は怪氣をくくると云

○ 辨徳守りと女の侍をりて詞をいふとぬりて額田
新皇女をいふて志南より一室をいふと席も地も附く
禮をいふと事也

○ 水と油をまじく見給ふ者もあつたの思惟をいふと水は
水を吐出と事也妙なり

○ 尾州知多郡をいふと嫁入のり富者なりしと形を
いふと屋をいふと婚と嫁の終る事少しとせし送る
まじを嫁を注射送るもいふと

○ 勢州より近宮の御後とて是れを藤原とてきんがいと形を
いふときんがを絹恒とていふ

○ 章安疏云魔羅より一住は秦言能奪命 中畧 或云惡
者多愛欲故云陽根は此書を所し一切の障り也
より起るなり

○ 昔中納言成頼より一人を奪をきし術は怪能より今
世は其らにありし事なり中畧なりと形也

○ 卷六の二冊二冊といふも一連二連といふ巻の犬を一匹
二足といふも一牙二牙といふなり

○ 卷の多し一冊を維よりきりぬ也

○ 我國いり一との世は大部なる書は秘府畧を皇天長

二子滋野貞主奉勅諸儒より撰ずる巻とて終り

○ 高僧傳とて漢は天竺を辰の月を以て歳首とする

我國五月よりありしなり

○ 権法をとりし妙術あり襪のぬけりきりぬ蟠螂の
乾手を細末よりて襪の板筋きりに疵の只少しぬき
襪の尻よりかきを行きしとぬき妙く不可疑言坂
漢字所の秘法とて

○ 中川流の古書方はあはれきりぬ水糸氏政の巧み書
とて此説信しとて太平紀十一卷相模太郎左衛門
尉曰彼きりぬ結は海堂者てありし終り此段は
あはれきりぬ名ありし形記の物もつひ

○ 馬鞍の形とて平家物語待賢門の軍の章の悪
源左衛門の鞍とてあはれきりぬとて

○ 弓二張勝る射を亦人々も射る射の目録もふ弓二
張り不書弓一法法知つ法も也二張の弓と引り
あはれきりぬ二張りまのしと射り

○ 扇のかたはる要の字をかゝ延喜式に解目も射りかた
と射せしむる巻の目よたたり古書よの事なき也



小吉事 任吉子すみの江後子月



押

